

皆様おはようございます。まずは神学校を無事に卒業出来ましたことをご報告します。一時は無理かなと思った瞬間がありましたが、青葉台教会のすべての皆様の励ましとお祈りに支えられましたことを心より感謝申し上げます。そして再び皆様とお会い出来、共に礼拝を捧げられます恵みを大変嬉しく思っています。卒業式の後から急に先生と呼ばれ始めていますが、誰のことを呼んでいるのか全く実感はありません。

思い返せば4年前に神学生派遣で青葉台教会から始まり、2回の派遣、そして来月からの嵯峨教会赴任前に、また2025年度最後の主日に再びお呼び下さり、最後も青葉台教会の礼拝で締め括れる恵みに感謝しています。そして神学生時代には普通なら出来ないような証をさせて下さった江上先生と寛大にお聞き下さった皆様に改めて感謝申し上げます。

今日は棕櫚の主日です。受難週の始まりです。イエス様が十字架にかかれる前の週の最初の日でエルサレムに入城された日になります。マタイ21章で、大勢の群衆は自分の服を道に敷き、ほかの人々は棕櫚の枝を道に敷き、「ダビデの子にホサナ。主の名によって来られる方に祝福があるように。いと高きところにホサナ」とイエス様を歓迎して叫びました。それは喜びと期待に満ちた光景でした。しかし、その人々が数日後の金曜日にはイエス様を「十字架につけろ」と変わってしまうのです。

当時多くのユダヤ人はローマ支配からの解放を望んでいました。政治的な救いを期待していました。しかし、イエス様は真逆の道を示しました。武力や政治ではない「神の愛」と「神の国」への道です。登場も軍馬ではなく、荷物を運ぶ小さい子ロバです。これはゼカリヤ書の預言の成就でもあり、華やかな王の姿ではなく高ぶらない平和の王の姿でもあります。しかし、人々はこの姿に失望しました。そこに腹を立てた律法学者たちが先導してイエス様の処刑を求め、本意でなくても人々はその空気に飲み込まれてイエス様を十字架につけてしまいます。ましてやイエス様の十字架の出来事が「神の救いの計画」であることを人々は知る由もありません。

今日は、この救いの計画の始まりであるイエス・キリストの系図からお話させていただきます。おとしのアドベントでも同じ箇所から「マタイの系図に見るクリスマス」という題でお話しました。この時は長瀬さんの司会で前日に10回も練習されて読んで下さいましたが、それでも何度も噛まれ、違う司会の方でもう一度、是非この箇所からやってほしいというリクエストを頂いていました。当初の予定では今日は梶原修さんが司会になっていましたが、本日仕事が入って変更になり、野村泰由さんに活舌の良くなる恵みが注がれました。修さんからは「助かった」と返事が来ました。泰由さんには拝読感謝致します。

マタイのイエス・キリストの系図は、「アブラハムの子ダビデの子、イエス・キリストの系図」で始まります。アブラハムからイエス様の誕生までのカタカナの羅列のような印

象があります。ところがマタイがこの系図で伝えたいのは単なる血筋の記録ではなく興味深い神様の救いの計画です。まさに「ダビデの子にホサナ」なのです。

創世記12章で神様はアブラハムに、「示す地に行きなさい」「あなたを大いなる国民とする」「地上の氏族はすべてあなたによって祝福に入る」という三つの中心的な約束をされます。サムエル記下7章では、神様はダビデにナタンの預言の中で、「あなたの身から出る子孫に後を継がせ、その王国を揺るぎないものとする。この者がわたしの名のために家を建て、わたしは彼の王国の王座をとこしえに堅く据える」と告げます。

イエス様による救いの計画は旧約聖書にすでにあり、旧約聖書の言葉は必ず成就するのです。系図の最初の14代は、イサク、ヤコブと続いて行きますが、ヤコブからは長男ルベンではなく、四男ユダの兄弟へと続きます。ルベンは、創世記49章で、ヤコブのそばめと寝て父の寝床を汚しました。ルベンはヤコブから「長子の誉を失う」と宣告されてその通りになります。しかし、ユダも系図に出て来る一人目の女性で、息子の嫁であるタマルと近親相姦の罪を犯します。息子の死後に遊女に変装したタマルに騙されるのです。しかし証拠を握られていてタマルが正しいと認めて罪を悔い改めました。またヨセフ物語ではベニヤミンの身代わりになるとしてヨセフに解放を嘆願したのもこのユダです。こうして、ルベンは長子の権利を失い、ユダがヤコブから王権を約束されました。これでダビデ王はユダ族から出ることになります。

ユダの王権は永遠性を持ち、バビロン捕囚で王が途絶えたように見えても系図は途切れませんでした。神様の救いの計画は途絶えることはありません。なぜならイエス様が誕生しなければ救いの計画は完成しないからです。

おとしは長瀬さんより、「全部読んだ割には登場人物が少なかったな」とご指摘を受けましたので、今回は出来るだけ多く登場させたいと思います。タマルが遊女に変装して義理の父であるユダを騙して生まれたのがペレツとゼラの双子です。この双子の誕生は棕櫚の主日のロバと関連します。ゼラが先に手を出して助産婦が赤い糸を結びます。しかし、ゼラは引っ込みペレツが先に生まれました。この、人の予想を覆して進む神様の働きがイエス様のロバでのエルサレム入城なのです。それはへりくだってイエス様が十字架に向かう道なのです。神様は人が思い描く方法ではない仕方で救いを実現をされます。ですから人々は理解出来ずに失望してしまったのです。

マタイはペレツやゼラのような複雑な家庭環境で生まれた者も救いの系図に入れました。それは系図をきれいごとで飾るのではなく、過去の過ちや罪の真実と立ち帰りによる神様の救いを強く伝えたいからなのだと思います。

次に続くペレツの子ヘツロンとアラムは神様の沈黙の時代に救いの系図を繋ぐための存在として入っています。アミナダブとナフシオンは荒野で民を率いたユダ族のかしらです。ナフシオンの子サルモンがラハブによってボアズをもうけます。ここで二人目の女性ラハブに注目したいと思います。ラハブはエリコの遊女でした。社会的にも道

徳的にも蔑まれていて系図に名前を連ねるような人物ではありません。しかし、イスラエルの神を信じるに至りました。イスラエルの民がエリコに入る前にヨシュアが送った二人の斥候をかくまったのがラハブです。ヨシュア記2章でラハブは二人の斥候に信仰を告白します。

「主がこの土地をあなたたちに与えられたこと、またそのことで、わたしたちが恐怖に襲われ、この辺りの住民は皆、おじけづいていることを、わたしは知っています。…あなたたちの神、主こそ、上は天、下は地に至るまで神であられるからです」

ラハブは、出エジプトでイスラエルの神によって海が分けられたこととヨルダン川の水がせき止められたことを聞いてアモリ人の王が勇気を失ったことを知っていました。アモリ人は恐れるだけで悔い改めませんでした。ラハブは信仰によって二人の斥候から自分の家族の救いの約束を取り付けました。約束の印は窓に結び付けた赤い紐です。そして、エリコの城壁が崩れ落ちたあとにラハブの家だけが残りました。

この赤い紐は神様の救いの約束の保証でした。ここに出エジプトの過ぎ越しの出来事が思い起こされます。小羊の血が鴨居と二本の門柱に塗られた家が守られました。この旧約聖書の赤い紐と子羊の血は新約聖書でイエス様が十字架で流された血潮を現わしているのです。

次にボアズが三人目の女性ルツによってオベドをもうけます。ルツはモアブ人でありながら姑のナオミに「あなたの民はわたしの民、あなたの神は私の神」と告白してイスラエルの神に従いました。それで系図に異邦人の女性として名を連ねています。そして、オベドからエッサイ、エッサイからダビデ王が誕生しました。

ダビデは系図の四人目の女性ウリヤの妻と不倫をして姦淫の罪とそれを隠すためにウリヤを殺すという殺人の罪を犯します。バトシェバという名を書かないのは王としての罪の重大さを隠さないためなのです。ではそんなダビデがなぜ系図に入るのでしょうか。それは神様の救いの計画が人間の正しさではなく、神の恵みと約束によって進むからです。ダビデは預言者ナタンに罪を指摘されて言い訳をせず素直に罪を認めました。詩編51篇でダビデは悔い改めて祈りました。12節で「神よ、わたしの内に清い心を創造し、新しく確かな霊を授けて下さい」と砕かれた心を示しました。

私たちがダビデのような砕かれた心で日々悔い改めたいと思うのです。イエス様は罪人のためにこの世に来られました。それは一人も滅びないで全ての人が悔い改めに至ることを望んでおられるからです。今世界は混迷の中にあります。神様は忍耐してその時を待っておられます。軍事作戦という名分で大国のリーダーが戦争を平然と起こしています。イスラエルもイラン空爆で世界中に国が知れ渡りました。それならば唯一の希望としてイスラエルの神様が世界中に知れ渡る機会となれば幸いです。もし今後戦争が激化して世界中で食糧危機が訪れるならば、すべての人が聖書の御言葉に触れて希望を持てるなら幸いです。再びイエス様が来られるその時が満ちるまでに平和が訪れることを節に願います。

次にソロモン王からバビロン捕囚まで、14代の王が続きます。ソロモンは知恵の王でしたが晩年は偶像に転落します。ソロモン王を通して人の弱さと神の恵みの大きさを知ることが出来ます。ソロモンの息子レハベアムは政治に失敗して王国を分裂させます。アビヤ、アサ、ヨシャファトは比較的良い王であり、ヨラムは悪い王です。ウジヤは成功して傲慢になり、ヨタムは良い王でアハズは悪い王の代表です。

ヒゼキヤは祈りの王であり、マナセは極悪な王でしたがバビロン捕囚によって悔い改めます。神様はどんな悪い者にも立ち帰る道を残しておられます。アモスは悪を引き継ぎ、ヨシヤは改革の王であり回復の希望がありましたが、エコンヤがバビロンへ移住させられて王国は崩壊します。

バビロン捕囚からイエス様の誕生までの14代の登場人物はほとんど名を知られていません。ゼルバベルは第二神殿を立て直したことで少しは知られています。シャルティエルから後の人物はこの系図にだけ名前が出て来ます。その9人はアビウド、エルヤキム、アザル、サドク、アキム、エリウド、エレアザル、マタン、ヤコブです。神様は「名もない人」をも尊く扱うお方なのです。「誰だか分からない人たち」をも見捨てないお方なのです。神様は小さな忠実、小さな信仰、小さな歩みをも見ておられます。私たちがこの系図に繋がっています。ですから神様は私たちの小さな生き様をも見ておられるのです。

そしてヤコブからヨセフが生まれ、系図の最後は、今までとはパターンが変わりません。ヨセフからではなくマリアからイエス様が生まれます。イエス様はなぜヨセフではなくマリアから生まれたいといけないのでしょうか。それは、イエス様が人間の系図に属しつつも、人間の父によるのではなく聖霊によってマリアが身ごもらなければならなかったからです。そしてこのことがイエス様の十字架の死において私たちの罪のために、罪のないイエス様にしか出来ない、イエス様の血潮においてしか完成されない救いの計画なのです。

今日マタイはイエス・キリストの系図を通して語りました。神様はあらゆる者を用いられます。汚れた過去を持つ者、複雑な家庭に育った者、名もなき者、罪を犯した者、そのすべてを救いの計画に招き入れます。だから、この系図に繋がる私たちの人生も、神様の救いの計画の中にあります。その計画の中には遅いも速いもありません。神様には時に適った最善の時があります。神様は私たちを最善に用いるために、今もここにおられます。来週はイースターです。イエス様の復活の勝利と希望と新しい始まりを心から賛美しようではありませんか。